**小枝　九郎（こえだ・くろう）**

**1、プロフィール**

方言詩人。戦前、文芸誌「月刊東奥」、方言詩誌「芝生（カガワラ）」に、津軽方言詩を発表。戦後は、詩誌「壱年」、「北」、「雪」などに抒情詩を発表した。

＜生没＞

1915（大正４）年２月24日～1999（平成11）年５月９日

＜代表作＞

「津軽弁の詩の本コ 芝生」第一号

＜青森県との関わり＞

中津軽郡堀越村（現 弘前市取上）出身。戦前、弘前で方言詩集「芝生」を発刊。戦後、青森で古書店緑書房を開店した。

**２、作家解説**

大正５年中津軽郡堀越村に、父栄助、母くにの四男として出生。中津軽郡立玉成高等小学校では級長を務めたが、家庭の経済的理由により退学。店員見習いをしていたが、肺浸潤を患い自宅療養となる。昭和７年頃秋村静映と知り合い、詩作を始め、抒情的方言詩を発表していた植木曜介に詩作の指導を受ける。詩誌「蒼穹」を創刊、詩誌「府」に作品を発表し、東奥文壇などで活躍する。９年「津軽方言詩集」（私家版）を発行していた一戸謙三を植木とともに訪ね、津軽方言詩誌「芝生(カガワラ)」の発刊を計画する。「津軽弁の詩の本コ 芝生(カガワラ)」は、翌10年から11年にかけて四冊発刊された。「どゝこの／守子(アダ)コで／蛙(ゲロ)のこゝア／おがて行(エ)ぐ」（「早春(ハルサギ)の田圃(タモヂ)」、「芝生(カガワラ) 二」）。その後、横須賀海軍工廠に勤務し、14年東奥日報社から発刊された文芸誌「月刊東奥」の普及に努める。16年に肺浸潤が再発し帰郷、堀越村役場書記となる。日幌草太、木村助男、葉也子らが加わった再刊「おら達（だづ）の詩の本コ 芝生(カガワラ)」は、17年に六冊発刊された。

戦後、電気製塩業を経て魚肥対策本部書記となったが、22年に青森市浦町に古書店緑書房を開店する。詩誌「壱年」、「北」、「雪」などに抒情詩を発表し、青森県詩祭の開催にも尽力した。30年になって、妻と離縁。緑書房を閉店する。その後、事務局長として原水協青森県協議会の活動にも取り組む。36年八戸市の缶詰工場に勤務したが、肺浸潤が再発。38年以降盛岡市のパチンコ店に勤務しながら、凡そ35年間単身で居住。知人の間では小枝の所在、動向が不明となった。長き時を経て、知人へ津軽方言詩を付した年賀状を郵送するようになったのは、平成４年頃のことである。７年には弘前市立郷土文学館企画展「津軽方言詩の人々」で紹介され、９年には吉村和夫によって、「郷土作家の素顔 方言詩の人々 小枝九郎」が、陸奥新報に連載された。小枝自身も、９年に「今昔『津軽方言詩』」を陸奥新報に連載した。津軽方言詩の系譜、高木恭造などの方言詩人の作品、人物像など貴重な証言が綴られている。11年５月９日、逝去した。

**３、資料紹介**

〇「津軽弁の詩の本コ 芝生」第一号

雑誌

1935（昭和10）年２月15日

150mm×115mm

植木曜介、小枝九郎が中心となり発刊。一戸謙三の「口上」を初め、同｢相床（ダガサネコ）｣、植木｢謎（ナンジョ）｣、小枝｢ベゴコ｣、行本千介「隣（トナ）の媼（ババ）むし」、長谷川邦夫｢雪囲（かこひ）｣など、十篇の方言詩が掲載されている。小枝は編集発行人であった。

**「昭和十年二月、津軽弁の詩の同人誌「芝生」は、青々とみずみずしく萌（も）え出たのである。この「芝生」の編集兼発行人に私がなったのは、植木曜介の意見であった。それは、植木か弘前新聞の方が多忙であったことと、当時私が詩の同人誌｢蒼きゅう（穹）｣と「北標」の発行を手がけていたこと、また幹事的役目をしていたことにもあるようだ。「芝生」第一集は、活版の小冊子。十六ページ。限定百部。定価十銭。」**

**小枝九郎「今昔「津軽方言詩」③」、平成10年7月4日、東奥日報。**